

中国貨幣の歴史

22 五代十国の貨幣④—楚の貨幣—



てんさくふほう
天策府寶

建国時に鑄造された大型の銅錢で、記念貨幣と考えられている。錢銘は、唐の建国に貢献した2代皇帝・太宗が初代皇帝より「天策上將軍」の称号を与えられたとする故事に倣ったとされる。



開元通寶・鉛錢

10枚で銅錢一文(1枚)相当として流通させた錢貨。楚の錢貨では最も現存が多い。



けんふうせんほう
乾封泉寶・鉄大錢

鉛錢の国外流出を受け、重厚で持ち運びが不便で、流出しにくい錢貨として鑄造された。1枚で銅錢十文相当として流通させた。

五代十国時代の楚では、他の南方の諸国（閩^{びん}、南漢）と同様、錢貨需要が高まるなかで、銅より地金価値が低く原料確保が容易であった鉛、鉄を原料とする錢貨を鑄造、発行した。楚の建国者である馬殷^{ばいん}の貨幣政策は、華北王朝の貨幣流通にも影響を与えた。

五代十国の時代（907～960年）、湖南省から広西チワン族自治区桂林方面にかけての内陸に位置し、後進地域であった「楚」（907～951年、湖南省長沙〈国都〉）では、建国者・馬殷（852～930年）が茶などの産業振興と富国強兵を急ぐとともに、銭貨として鉛銭、鉄銭を鑄造、発行した。その貨幣政策は、華北王朝の貨幣流通などにも影響を与えた。

内陸の楚では、塩の確保に苦しみ、塩を輸入するための銅銭の確保に迫られていた。未開の地を多く抱えた楚では、唐代において銅銭「開元通宝」の流入が少なく、産銅も振るわなかったため、銅銭を新鑄することは困難であった。こうしたなかで馬殷は、まず産業面で、建国当初より茶をはじめ絹、米などの生産力向上と華北・華中への輸出を奨励し、湖南は茶の有数の産地となっていく。当時、唐代以来の揚子江流域の農業生産力の発展が上流の湖南地区に波及しつつあり、そうした状況ともあいまって、馬殷の産業・貿易振興策は列国のなかで大きな成果を取めたものとされている。馬殷は、茶の輸出市場の確保と保護を求め、華北王朝「後梁」（907～923年）に毎年茶を献上する一方で、茶の輸出による豊富な財源をもとに強力な直属兵団も擁した。

馬殷は、産業・貿易振興を通じた銅銭の確保の一方、国内の貨幣政策においては、産業振興に伴う貨幣需要の急増と銭貨不足に対し豊富に産出する鉛や鉄を活用した鉛銭や鉄銭を主たる流通貨幣とし、銅銭を国庫に集中させる政策を推進する。馬殷は、後梁の太祖より楚王に任ぜられ記念貨幣的な大銭「天策府宝」（銅銭・鉄銭）を鑄造するが、その後、「開元通宝」銘の鉛銭を鑄造、発行した。この鉛銭は、銅一文銭（小平銭）と同じ大きさで、10枚で銅銭一文（1枚）相当とし、城壁で囲まれた交易が盛んな市街でのみ流通させた。城内では鉛銭、銭貨流通が少ない農村など城外では銅銭を使用させ、鉛銭と銅銭の出入りを禁止したが、これは、商人らを通じた銅銭の国外流出を回避するとともに、楚が国家的に城内で銅銭を回収・集蓄し、その代わりに鉛銭を流通させたものとも考えられている。こうした流通政策は、南に接する「南漢」（917～971年）でもみられ、馬殷の政策を模したと考えられている。

この鉛銭も、商人らを通じて、鑄潰されて鉛の地金として、あるいは、鉛銭のまま国外へ持ち出されるようになったため、馬殷は、重厚で持ち運びが不便な鉄大銭「乾封泉宝」を鑄造し、鉄大銭1枚を銅銭10枚相当として通用させた。しかし、楚では、鉄大銭の投入後も、輸出用の銭貨として鉛銭の鑄造を続けたとされている。華北王朝「後唐」（923～950年）では、鉛銭が持ち込まれて銅銭が流出していく状況に対し、楚の鉛銭の持ち込みの禁令が繰り返し出されたが、禁令の実効は挙がらなかった。

なお、楚の貨幣は、「開元通宝」や「乾封泉宝」は唐の銭名を用い、「天策府宝」の「天策」の銘は唐の太宗の故事に倣ったものとされる。

国内での鉄大銭の通用は、国外持ち出しを困難にするという目的を達したが、大口の商取引などで銭貨の授受・搬送の負担が大きく、「券契」と呼ばれる小切手・手形の利用を促進した。鉄大銭を予め預り業者に預け、それを引当てに券契を使用し、鉄大銭の授受を回避したものとされる。宋代に鉄銭を流通させた四川において手形の一種である「交子」が流通したが、券契は交子の先駆ともいえる事例である。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

- 日野開三郎、『日野開三郎 東洋史学論集 第5巻 唐・五代の貨幣と金融』、三一書房、1982年
宮崎市定、『宮崎市定全集 第9巻 五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992年
宮澤知之、『中国銅銭の世界—銭貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007年
山岡直人、「中国貨幣の歴史 21 五代十国の貨幣③—閩、南漢の貨幣—」、『金融研究』第27巻第1号、2008年